白山火山の歴史時代の活動に関連ある史料

東　野　外志男　　石川県白山自然保護センター

THE DOCUMENTED RECORD OF THE HISTORIC ACTIVITY OF MT. HAKUSAN

Toshio HIGASHINO, *Hakusan Nature Conservation Center, Ishikawa*

は　じ　め　に

古文書に記された白山火山の活動記録については，これまで大森(1918)・森田(1929)・玉井(1935, 1957)・武者(1941)・日置(1942, 1956)・石川県・金沢地方気象台(1961)・上杉(1986)などによってまとめられている。しかしながら，それらは用いた史料や，同じ史料に対しても評価が異なることがあり，必ずしも全てが一致しているわけではない。本報告は白山火山の歴史時代の活動を考察する際の基礎資料とすべく，これまで収集できた同火山の活動に関連ある記録を，疑わしいものも含め掲載したものである。ただし，これまでの報告で白山火山の活動に関連あるとされてきた記録については，それぞれ出典にあたり内容に正確を期したが，2，3については原文が確認できず，それらは掲げてない。今回収録した記録は，内容の違いから2つに分けて示した(表1，表2)。1つはその内容が白山火山の活動を直接に示すもので，もう1つは直接に白山火山の活動を示すものではないが，白山火山の活動を示していると解釈可能なものである。表には出典を明記し，出典が写本や版本の場合にはその所蔵先も示した。

直接に白山火山の活動を示す記録

内容が直接に白山火山の活動を示していると解釈できる記事を表1に示す。ここで直接に白山火山の活動を示していると解釈したのは，描写された内容が現在の知識から火山現象を示していると推定できるもの（例えば，長久三年の『白山之記』の“童子”や天正十年の『混見摘写』の“法師”の出現が噴煙を表わしているがごとく）や，“自焼”や“焼出”，“地獄出現”，“発火”のような語句が白山の山に対して用いられているものである。また，『混見摘写』に用いられている“なる”については，これらの記事がまとめて記され，“今度白山大なり御尋に付申上候事”という事書と，“右之分、牛首村・風嵐村に罷在申候者とも承申、地こく大空に唱申様子覚候由、御座候、以上、万治二年六月九日、右品々寄合所へ書上申候”という奥書があり，記事の中に“なる”という語句が白山火山の活動を示すことが明瞭なもの（例えば万治二年の記事）があることから，すべて白山火山の活動を示すものと解釈した。

これまで白山火山が活動した年としてあげられてきたもののうち，今回その年の活動を示す記事が確認できなかったものは治承元年(1177年)と天文十七年(1578年)のものである。大森(1918)・日置(1942, 1956)・玉井(1935, 1957)などは，“治承元年四月十二日白山自焼”・“天文十七年白山焼く”という記事が『本朝年代記』に記されているとしているが，彼らのいう『本朝年代記』という書物の所在が確認できなかった。『國書総目録』第七巻（岩波書店編，1970）の『本朝年代記』の項には，別称として『新編分類本朝年代記』（田　登仙，1684）があげられているが，『新編分類本朝年代記』にはそのような

記事は見いだせなかった。代わりに同書の巻一波之部白山権現の項に”炎上高倉院治承元年四月十二日加賀目代師高兵火師高流罪餘類禁獄”という記事があり，これは神社の炎上を示すものである。

今回の調査で従来明らかにされてきたものに加え，慶長四年(1599年)・同五年(1600年)・正保二年(1645年)・慶安元年(1648年)・万治元年(1658年)の各年に白山の活動を示す記述が見いだされた。それらは全て『混見摘写』に記されているものである。慶長五年(1600年)のものについては，今回調査できた3冊の写本（金沢市立図書館の「加越能文庫」と「蒼瀧館文庫」蔵のものと，石川県立図書館蔵のもの）はいずれも白山火山が活動した年を慶長三年としているが，関ヶ原の戦いが慶長五年に起きていることと，この記事が慶長四年の記事の後におかれていることから，五を三と誤記したのであろう。石川県立図書館蔵の『混見摘写』には，三の横に[五カ]という写本者の注が付されている。

記録の中には，その内容が白山火山の活動を示すことは明らかであるが，活動年代が示されていないものが3つある。1つは『相良家文書』にあるもので，天文二十三年(1554年)の記事の後に掲げてある。これは天文二十四年二月七日付の文書で，天文二十三年から始まった活動のことをさしている。あとの2つは，『混見摘写』に記されているものである。そのうち，天正七年の記事の後に掲げたものは，白山火山が信長の御代に活動したということであるが，内容と天正十年の記事の前に記されていることから，天正七年の活動を表わしている可能性が強い。寛永十七年(1640年)の記事のあとに掲げたものは，その内容から白山の活動時期としては寛永十四年(1637年)から正保元年(1644年)の間が考えられる。寛永十七年に大汝（峰）から長滝寺にかけて灰が三寸程降るという活動記録があることから，この記事は寛永十七年の活動を表わしている可能性がある。

天文二十三年(1554年)から始まった活動は，『白山宮荘厳講中記録』によると“丙辰の年”（弘治二年；1556年）に止んだとなっているが，『白山諸雑事記』によると弘治三年(1557年)を活動の終わった年としている。『白山諸雑事記』の記事は古記録をもとにしたものであり，記事内容からその古記録は『白山宮荘厳講中記録』である可能性が強く，弘治三年は弘治二年の誤記であろう。

表1に示した記事のうち延応元年(1239年)のものについては，玉井(1935,1957)は『白山宮荘厳講中記録』の記録をもとに考察し，これらの記事は白山本宮の火災を誤って白山の噴火としたものであるとした。この年の記録を除くと，今回の調査で白山火山の活動を直接に示していると解釈できる記録は，長久十年(1042年)のものの他は，天文十六年(1547年)から万治二年(1659年)までのほぼ100年間のものである。天文二十三年(1554年)の活動は弘治二年(1556年)まで続いており，その間の年も活動した年に含まれるので，この16世紀中頃から17世紀中頃までの113年のうち記録に残る活動をした年数は13年である。そのあいだの静穏期の長さは最も長くて40年で，平均すると8年である。長久十年(1042年)の活動から天文十六年(1547年)の活動までほぼ500年の間隔があり，また，万治二年(1659年)から後，現在まで，昭和10年に千仞滝付近から小規模な噴気孔が出現した（東野・山崎，1988）以外は，白山火山は活動らしい活動を行なっていない。このことから，天文十六年(1547年)から万治二年(1659年)までのほぼ100年間は，白山火山が頻繁に活動していた時期であるといえる。

間接的に白山火山の活動を示す記録

直接に白山火山の活動を示していないが，その内容から間接的に白山火山の活動を示すと解釈することが可能な記事を表2に示す。慶雲三年(706年)の記事は越前の国の山灰を白山火山の活動と解釈したものである（玉井，1957；上杉，1986）。しかしながら，『続日本記』巻三の慶雲三年秋七月乙丑の条に同様な記事，“丹波、但馬、二國山火、遣使奉幣帛于神祇、卽雷聲忽應、不撲自滅”（黒川勝美・國史大系編集會編，1966）があり，慶雲三年の記事は単に越前の国の山火事を表わしているものであ

るという考えもある(日置，1956)。仁寿三年(853年)と貞観元年(859年)の記事では白山比咩神社の叙位を，元慶八年(884年)の記事では“夜中有火”を，それぞれ白山火山の噴火に関係づけたものである。ただし，後者については，元慶八年は宗叡が亡くなった年で，宗叡が白山にきて“夜中有火”の現象が起きた年は天長八年(831)から数年して以降であることが前後の文章からわかるが，特定できない。

これらの記事はあくまでも間接的に白山火山の活動を示すものと解釈されるものであり，そのため，仁寿三年(853年)と貞観元年(859年)，元慶八年(884年)の記事を白山火山の活動に関連ある記録として示した大森(1918)は，これらに対して“或ハ白山ガ噴火セシヲ示スニ非ザランカ”という注を付している。また，慶雲三年の記事については，上述したように誤りではないかという意見もある。そのため，これらの記事を白山火山の活動を示すものと結論するには慎重になる必要がある。今後他の資料などからも考察する必要があると考えられる。

謝　　辞

石川県立図書館加能史料編纂室の東四柳史明氏と木越祐馨氏，室山　孝氏には，古文書の解釈について御教示・御助力をいただき，また，本論文の初期の草稿を読んでいただいた。山崎正男氏には本文を読んでいただいた。史料の収集に際しては，金沢市立図書館の袖吉正樹氏・岐阜県教育センターの岩田修氏・松任市立図書館の得田公明氏にお世話になった。以上の方々に感謝する。

文　　献

田　登仙（1684）新編分類本朝年代記（版本）．大森太右衛門．

東野外志男・山崎正男（1988）1935年に白山の千仞滝に出現した“噴気孔”について．石川県白山自然保護センター研究報告　第15集，p.1-7．

日置　謙（1942）加能郷土辞彙．982pp．金澤文化協會．

日置　謙（1956）改訂増補加能郷土辞彙．1042pp．北国新聞社．

石川県・金沢地方気象台（1961）石川県災異誌．178pp．石川県．

岩波書店編（1970）國書總目録第七巻．950pp．岩波書店．

黒川勝美・國史大系編集會編（1966）新訂増補國史大系第二巻「続日本記」．561pp．吉川弘文館．

森田平次（1929）白山神社考（白山比　神社叢書第五輯）．107pp.，國幣中社白山比咩神社．[「白山比咩神社叢書」合本復刻版，1975，名著出版]．

武者金吉（1941）増訂大日本地震史料．945pp．文部省震災豫防評議會．

大森房吉（1918）日本噴火誌上編．236pp．震災豫亡調査會．[復刻版，1973，稔書房]．

玉井敬泉（1935）加賀國手取川出水考　付流言蜚語．44pp．

玉井敬泉（1957）白山の歴史．70pp．石川県．

寺島良安（1913）和漢三才図会．[復刻版（和漢三才圖會刊行委員会編），1970，東京美術]．

上杉喜寿（1986）白山．411pp．ビジョン北陸．

表1　直接に白山火山の活動を示す記録

和暦	西暦	記事
長久三年	一〇四二	○然間長久年中壬午一悪比丘出来、号出雲小院良勢、其性凶悪其行非法、住越前室、権現奉下其方坂本、号新宮、追去三方座主別当、押領参人所進物、致如是等非法之間、加賀馬場行人等数十人、望越前馬場、以初更時打塞彼良勢住所室戸、擬焼殺之時、良勢云、此身既蒙権現罰早、欲立不能立、但此室内寄宿参人数十人、被焼死無道也、出於此後、可被付火云々、如云良勢一人〻〻次第出早、其後良勢焼殺、放火輩寄宿加賀室、次日下中本宮早、其室一人僧止住矣、夜半計有大声、告云、汝出室云(撃)而、以石打室、僧迷悶不出、又重打之、雖打、弥為恐不出、屢又投繋土石、如両(雨)、斯時迷出室、傍有一丈余石、名采女、其石影隠見之、自御在所後有二人童子、長十丈計掻土石埋室、其両三堂宇、惣四五宇埋之、成一岳、其所穿土石跡二所、一所澄水名今翠池、一所雖成深谷、其土石投道、作細長小山、所埋室堂財(材)木端少〻出之、寄(奇)異寄(奇)特不可勝計、案其故、放火殺害輩寄宿故、極不浄也、仍被埋之歟、冥衆所為及末代、是難有事也、[『白山之記』]
延応元年	一二三九	○山自焼四条院延應元年、[『新編分類本朝年代記』巻一、波之部神社之類白山権現項]
		○四条院延應元年白山自焼、[『倭漢三才図会』巻五十五、白山項]
天文十六年	一五四七	○天文十六年丁未年五月ノ末ヨリ白山嶽頂上ヨリ焼出ル、火煙土砂ヲ吹ル、漸々九月ニ至リテ鎮ル、此年白山郷内五穀不熟、[『猿丸又右ェ門家景由緒書』：『白川日記』所収]
		○後奈良院天文十六年白山麓地獄涌出、[『新編分類本朝年代記』巻一、波之部乾坤并天家之類白山麓項]
		○三日乙酉、加賀白山焼出云、[『年代略記』：『続史愚抄』四十八所収、天文十六年大歳丁未二月大条]
天文二十三年	一五五四	○天文廿三年甲寅四月朔日、当禅頂煙立登、恠之、五月廿八日山伏之実乗〻永賢遣見之、剣山南焼上、大盤石吹上、正殿大床ヤネ打抜、其後五月比大川水灰・ユ(硫黄)横流テ魚死ヌ、人民川水ヲ不含、六月比剣山悉籠目如煙出成、十月八日大震動シテ、国中諸人以外驚ク、当寺煙充満、川水又如前濁ル、其後湯煮事立山ノ地獄同之、又於処〻地獄火薪行ト男女間沙汰、一天下共同之、丙辰ノ年焼留、惣釆女辺依報ノ為躰相替也、[『白山宮荘厳講中記録』]
		○一、天文廿三年五月白山焼出、大山焼出ル事往古ヨリ度々也ト云々、古記考ヒ知ルヘシ、天文ノ山焼ノ比ハ尤白山惣長吏ノ支配也、故ニ見分ニ衆徒ヲ遣シタル由旧記ニモ載タリ、
		一、右天文廿三年ノ山焼ハ、三月ヨリ焼出、或ハ三月三日ヨリ焼出ルトモ云、又四月朔日ヨリ煙立トモアリ、彼恠異ニ付、当社ヨリ山伏ノ

表1　（続　き）

和暦	西暦	記事
		大乗坊ヲ遣シ見セシムル由、則登山シケルニ、剣ノ山ノ南焼上リ、大盤石ヲ吹上ケ、正殿ノ大床屋根ヲ打抜タルト云々、其後五月ノ比ハ、大川ノ水灰土横流シ、魚死シ人民川水ヲ不含、六月ノ比ハ、剣山悉ク籠(カ)目ヨリ煙ノ出ルカ如シ、十月ニ至リ当社マテ煙充満、川水又如前濁ル、十月八日ニ大震動セシ故ナリ、其後湯煮ユル事立山ノ地獄ト同シ、又処々ニ於テ地獄火ヲ薪ニ行ト、男女間ニ沙汰ス、天下共ニ同シト其時ノ日記ニ載タリ、 一、弘治三丙辰(丁巳)ノ年白山漸ク焼留ル、天文廿三年ヨリ四年目ナリ、山中采(カ)女ノ辺報ヒノ躰タラクニテ相替ル由、是モ日記ニアリ、 一、或記ニ天文廿三年甲寅五月六日ニ加賀国白山ノ麓ニ地獄出来スト載タリ、是則彼山焼ノ時ナリ、 （中略） 一、剣山ノ山伏、右天文廿三年ノ山焼ノ時、悉ク破損シテ其姿ヲ失ヘリ、剣山ノミナラス自余ノ山状モ変シタルナルヘシ、[『白山諸雑事記』] ○于時天文廿三年甲寅卯月二日(×八)ヨリ白山御前劔山焼出、地獄五色ニ涌上ルコト一丈余ナリ、院主道雅并宝光坊良松・西泉坊其外五月十五日ニ参詣仕候、前代未聞躰ナリ、[『長滝寺荘厳講執事帳』] ○同(天文)廿三年卯月自二日白山劔山焼出地獄五色涌上ル事十丈余リ、院主道雅法印・宝光坊良松・西泉坊五月十五日参詣ス、[『長滝寺経聞坊年代記録』] ○于時天文二十三年甲寅卯月二日ヨリ白山御前劔山焼出、地獄五色ニ涌上ルコト一丈余リ、院主道雅并宝光坊良松・西泉坊其外五月十五日ニ参詣仕候、前代未聞ノ事ナリ、[『長瀧寺真鑑正編』] ○天文二十三年甲寅ノ年三月ヨリ再ビ白山ノ雪頂ヨリ焼出、炎火土砂ヲ吹飛シ、恰モ雪ノ飛ガ如、此年此郷村五穀一切不實入、[『猿丸又右ェ門家景由緒書』：『白川日記』所収] ○五月六日に加賀國白山ふもとに地獄出來由申候なり、[『細川両家記』天文廿三年甲寅条] ○自五月白山焼出、[『和漢合運図』後奈良院天文廿三年項] ○又後奈良天文二十三年五月、自焼麓地獄出、[『新編分類本朝年代記』巻一、波之部神社之類白山権現項、〃山自焼四条院延應元年〃の記事に続いて] ○後奈良院乃御宇天文二十三年五月、此山岳ミづから焼て、麓に地獄來現すと云々、[『国花万葉記』巻十二、加賀國神社之部白山権現条] ○後奈良院天文二十三年五月亦自焼出而麓地獄出云云、[『倭漢三才図会』巻五十五、白山項] ○五月、白山發火、[『野史』巻六、天文二十三年甲寅条]

表1　（続　き）

和暦	西暦	記事
		○同廿三年五白山焼出、［『皇年代略記』後奈良院条］（天文）
		○廿三年五月白山焼失、［『皇年代私記』後奈良院天文廿三年条］
		○一向宗之事、いよ〳〵法度たるへく候、すでに加賀の白山もえ候事、説々顕然候事、［『相良氏三代記』（爲續長毎晴廣）法度寫』天文廿四年乙卯貳月七日付］
天正七年	一五七九	○天正七年己卯八月又白山焼出ル、此時ハ八月廿六日地獄谷ヨリ焼出、火石ヲフラシ、正殿ヲ破壊シ、神躰ヲモ破損スト云、［『白山諸雑事記』］
		○天正七卯歳八月廿八日ニ、白山地獄谷之大穴吹破、白山大御前之仏躰并社堂共破損、［『白山年代記并由緒』］
		○天正七卯年八月二十八日、白山地獄谷ノ大穴吹破、白山大御前ノ御尊躰并ニ社堂共破損、［『白山縁起』］
		○正親町天皇天正七年八月廿八日字地獄谷噴火、社殿并仏像ヲ毀損ス、［『白山比咩神社并摂末社明細図書』］
		○天正七年八月廿六日地獄谷ヨリ火石ヲ雨ラシ社壇及神體ヲ破ル、明年六月織田信長三社ヲ再建ス、［『古今類聚越前国誌』巻四、神社白山明神条］
		○信長様御代白山なり申候、是ハ大雲吹やふり、則御宮もそこね申候を、かんまく（マ）一わり（マ）建立仕候、［『混見摘写』十八］
天正十年	一五八二	○信長様御逝之砌、黒雲出、其内より法師のかたちなるもの三人見へ申候、［『混見摘写』十八］
慶長四年	一五九九	○加賀大納言様（前田利家）御逝去之砌（慶長四年三月三日）、七日之内白山なり申候、［『混見摘写』十八］
慶長五年	一六〇〇	○慶長三年（五カ）に白山なり申す候、是ハ関ケ原御陣、［『混見摘写』十八］
寛永十七年	一六四〇	○辰ノ六月十五日酉ノ下剋ゟ月有明ニ赤光ス、諸人不思義スル処ニ、白山大汝ゟ長瀧寺迄、ハイ二夜三日ノ内ニ三寸ホトフリタマル也、其内惣天赤光スル也、不思儀（議）多事也、経聞坊慶祐書留也、［『長滝寺荘厳講執事帳』］寛永十七年庚辰条（寛永十二年～正保元年）
正保二年	一六四五	○但馬様（松平直良）勝山に御座候砌（寛永十二年～正保元年）、白山大なり申候、是ハ嶋原一乱、［『混見摘写』十八］
		○正保二年酉ノ四月五日・同廿六日なり申候、これハ筑前様（前田光高）御逝去、［『混見摘写』十八］
慶安元年	一六四八	○大和守様（松平直基）御逝去（慶安元年八月十五日）之時もなり申す候、［『混見摘写』十八］
万治元年	一六五八	○去年（万治元年）戊九月四日なり申す候、北南の間ひかり物一ツ山に入申候、十月十二日小松中納言（前田利常）様御逝去、［『混見摘写』十八］
万治二年	一六五九	○當亥（万治二年）ノ二月晦日大なり仕候、白山に灰ふり事（福井大火事カイ）、［『混見摘写』十八］
		○同（万治二年）六月五日朝晩（夜ニイ）入、なり申候時分、別山にて南北にあたり黒雲出

表1　（続　き）

和暦	西暦	記事
		る、其内より長き壱丈計法師三人見へ申候、［『混見摘写』］十八］ ○六月八日己ノ刻計ニ、御山御厨之池ニ上ニ黒雲少計出、暫有而ヲヒタゝ敷鳴テ後、彼雲ノ内ゟ坊主之行躰ニて三人頭ヲ双テ脇ゟ上ヲ顕ス、室々ノ別当何茂是ヲ拝、不思儀(議)ニ思処ニ、其時節三州ハズ村之道者六人参会、是ヲ奉拝、則御来向ト思奉拝、モトユイヲ払ヒ下山スル也、是ハ御来向ニてハアラサル也、其後日々夜々御山之ヲヒタゝ布ナル事不知度、近国ニ響也、同其夜月サヘテ青天成ニ、月躰ゟ三筋三方へ御光立テ、其内一筋ノ御光甚光、暫有テ消失ス、 一、同六月十八日ゟ廿日迄、越州一国中アシ毛馬ノ毛降也、慶祐書留也、［『長滝寺荘厳講執事帳』万治弐年己亥条］

［凡例］一、字体や誤字・宛字の訂正は原則として出典に従い、返り点・送り仮名・振り仮名は省いた。なお、句読点はすべて「、」に統一し、句読点のないものについては、適宜施した。

右傍の［　］は誤字・宛字を訂正、（カ）は不明の文字を推定して判読したものである。

〔×八〕二は八の上に二が重ねられて書かれていることを示す。

一、著書（東野）による人名・年代の説明注は右傍に（　）で、誤字の訂正は［　カ］で示した。また、［　イ］は異本を、（ママ）は文意が通じないことを意味する。

［出典］『白山之記』・『白山宮荘厳講中記録』・『白山諸雑事記』・『白山年代記弁由緒』・『白山比咩神社弁摂末社明細図書』（「白山史料集上」、穴田三次郎・能島紘一・木越隆三編、石川県図書館協会発行、1979）、『新編分類本朝年代記』（版本、田　登仙著、大森太右衛門発行、1684、金沢市立図書館「稼堂文庫」蔵）、『和漢三才図会』（復刻版、和漢三才圖會刊行委員会編、東京美術発行、1970）、『白川日記』（写本、結城朝充著、1935、岐阜県立図書館蔵）、『続史愚抄』（新訂増補『國史大系』第十四巻、黒板勝美・國史大系編集會編、吉川弘文館発行、1966）、『長滝寺荘厳講執事帳』・『長瀧寺真鑑正編』（「白山史料集下」、能島紘一・伊林永幸編、石川県図書館協会発行、1987）、『長滝寺経聞坊年代記録』（「白鳥町史史料編」、白鳥町教育委員会編、白鳥町発行、1973）、『細川両家記』（「群書類從」第十三輯「合戦部」、塙　保己一編、經済雑誌社発行、1894）、『和漢合連図』（版本（訂補版）、圓　智著、丁子屋長浜衛発行、1658、金沢市立図書館「藤本文庫」蔵）、『国花万葉記』（版本（訂正版）、菊本賀保著、河内屋太助発行、1835、石川県立図書館蔵）、『野史』（飯田忠彦・竹中邦香編、国文社発行、1882）、『皇年代略記』（「群書類從」第二輯「帝王部」、塙　保己一編、經済雑誌社発行、1893）、『皇年代私記』（「改定史籍集覧」第十九冊「新加書通記類」、近藤瓶城編、近藤出版部発行、1902）、『相良氏三代(爲續長毎晴廣)法度寫』（「相良家文書」（大日本古文書）四七〇号、東京大学史料編纂所編、1912）、『白山縁起』（「白峰村史下巻」、白峰村史編集委員会編、白峰村役場発行、1959）、『古今類聚越前国誌』（写本、有馬純芳著、松任市立図書館「白華文庫」蔵）、『混見摘写』（写本、吉田守尚著、金沢市立図書館「加越能文庫」蔵）

表2　間接的に白山火山の活動を示すと解釈可能な記録

和暦	西暦	記事
慶雲三年	七〇六	○八月甲戌、越前國言、山灾不止、遣使奉幣部内神救之、[『続日本紀』巻三慶雲三年条・『類聚国史』巻第百七十三灾異部七火慶雲三年条・『日本紀略』慶雲三年条]
仁寿三年	八五三	○己卯、加加賀國白山比咩神従三位、[『日本文徳天皇実録』巻五、仁壽三年冬十月己未条]
		○十月己卯、加加賀國白山比咩神従三位、[『類聚国史』巻十四、神祇部十四神位二仁壽三年条]
貞観元年	八五九	○加賀國白山比女神正三位、[『日本三代実録』巻二、貞觀元年己卯春正月戊午朔廿七日甲申条]
		○加賀國、授白山比女神正三位、[『類聚国史』巻十五、神祇部十五神位三貞觀元年春正月廿七日甲申条]
元慶八年	八八四	○廿六日丁亥、殞霜、僧正法印大和尚位宗叡卒、（中略）宗叡到越前國白山、雙鳥飛隨、在於先後、夜中有火、自然照路、見臭奇之、[『日本三代実録』巻四十五、元慶八年三月壬戌朔条]

[凡例] 一、字体は原則として出典に従い、句続点はすべて「、」に統一した。なお、返り点・送り仮名・振り仮名は省いた。

[出典] 『続日本記』(新訂増補「國史大系」第二巻、黒板勝美・國史大系編集會編、吉川弘文館発行、1966)、『類聚国史』(新訂増補『國史大系』第五・六巻、黒板勝美・國史大系編集會編、吉川弘文館発行、1965)、『日本紀略』(新訂増補「国史大系」第十巻、黒板勝美・国史大系編集會編、吉川弘文館発行、1965)、『日本文徳天皇実録』(新訂増補「國史大系」第三巻、黒板勝美・國史大系編集會編、吉川弘文館発行、1966)、『日本三代実録』(新訂増補「國史大系」第四巻、黒板勝美・國史大系編集會編、吉川弘文館発行、1966)